

福島第一廃炉国際シンポジウムに参加して

佐藤和宏+筒井哲郎

1. 沈黙の沃野

2017年7月1日(土)、私たち(筒井哲郎・律子夫妻と私の三人)は、翌2日(日)と3日(月)、広野町といわき市で開催される第二回福島第一廃炉国際フォーラムに参加するため、雨の東京を後にして一路福島に向かい、常磐高速道路を広野インターチェンジで降りた。茨城県を抜けると、雲の切れ目から日が差してきた。

去る3月31日に避難指示が解除されたばかりの地域や、5月の森林火災跡の様子が気掛かりだった。広野で降りるとJ-ヴィレッジや、福島第一のデブリ取り出しロボット開発をしている日本原子力研究開発機構の檜葉遠隔技術開発センターの大きな建物が見える。浜通りを国道6号線沿いに続く富岡町・大熊町・双葉町の放棄された町並みは、昨年11月に訪れた時とほとんど変わりが無いように見える。福島第一原発に近い町々は、6号線の道路上だけが車で通り抜けることを許され、脇道は矢来で閉ざされている。しかし昨年秋と違うのは、明らかに増員された監視員、数10分の間に何度もすれ違うパトカー、道の両側を遮る矢来に組まれたフェンスも追加補強され、警戒はより厳重になっているようだ。

この緊張感はいったいどこから来ているのだろう。打ち捨てられ朽ちていく町と向き合う度、私たちはいつも言葉を失う。この風景こそ人々の生活を無惨に破壊した原発事故の加害の証だ。改めて確認し合う私たちだった。

森林火災の現場、浪江町井出・十万山周辺にたどり着くには国道6号を山側に折れなければならぬが、横路のほとんどが閉ざされていて抜けられない。ようやく見つけた道路もすぐに監視所に阻まれてしまう。許可証がなければ先には行けない、関係者以外立ち入り禁止というわけだ。

こうして私たちは、双葉町・浪江町エリアを抜け道を求めてしばらく徘徊することに。結局、一方通行と矢来に阻まれて、この迷路から山側には抜け出せなかったけれど、道すがら目にした風景はとりわけ感慨深いものだった。

路肩に車を止め田舎道を歩いてみた。日差しは強く、緑は深い。田園の息吹きは原発事故とはかかわりなく鮮やかだ。うっすらと煙るような山並と田畠、水気をタププリ吸ってモリモリと膨張した森。そうか、梅雨明け間近の今頃は生命の躍動する季節なんだ。垂れ込めた雲と灰色の日差しの中に大地は柔らかく逞しく輝いていた。

生け垣と木立に囲まれた大きな民家、縁側や庭先にはあの日まで、日向ぼっこするお年寄りの姿があったろう、駆け回る子どもたちの元気な声も飛び交っていただろう。日本のどこにでもある長閑な田舎の風景。しかし、今ここには、人の気配がまったく無い。

避難指示区域は未だに帰宅困難区域・居住制限区域・避難指示解除準備区域に分けられている。通り過ぎる谷あいの村がどの区域に当たるのか、どれほど汚染されているのか定かではないが、とにかく家々はみな人気のないモヌケの殻のままだ。家族や共同体の住み家、生産と労働の拠り所だったこの村。人の営みを失った今は、緑に沈む民家の影と、沈黙する沃野だけが目の前に茫漠と広がっている。

いったい、3月31日の避難指示解除以来、帰還の実態はどうなっているのか？ 帰還者の比率が住民のわずか6%との情報もある。しかも車の運転ができる60歳代がほとんども。原発事故から6年を経たなお、村や町の暮らしぶり復活には程遠いようだ。帰還者はいったい何処に？ 迷走道中の車窓からそれらしい住民を見かけることはついぞなかった。私たちは生命力に溢れた豊潤な田園風景と、人が消えた虚ろな集落風景の埋めがたいギャップに打ちひしがれ、宿泊先のいわき市への帰路についた。

2. シンポジウム第一日目・広野町中央体育館

今回の廃炉シンポジウム、正確には「第二回福島第一廃炉国際フォーラム」の初日の会場はいわき市の隣り町、広野町の中央体育館だった。

梅雨の晴れ間、というには強すぎる日射しの中を車で北上すること30分あまり、広野町のランドマーク東京電力広野火力発電所の二本煙突が見えてくる。福一原発の20^{キロ}圏からは僅かにハズレる広野町だが、東電が建設し福島県に寄贈した日本サッカー界初の総合スポーツ施設(開設1977年・総工費130億円)「J-ヴィレッジ」が立地するなど、その因縁浅からず、町自ら「エネルギーのふるさと」と呼ぶほど、長く東電と共に歩んできた福島でも特異な町である。国道脇に役場、体育館、高校、丘の上に中学校、運動場などの施設が連なる。

体育館前にはテントが設えられ、町民による大鍋での調理も始まっていて、大きな野外食堂の趣だ。館内はほぼ満席、原発ムラのビジネスマンとおぼしき集団を中心に参加者は500人を超えているようだ。数人の高校生も目につく。外国人も100人近くはいるようだ。準備を含め動員された町民もかなりの人数と思われる。

原子力損害賠償・廃炉等支援機構山名 元理事長の開会の辞を皮切りに、経産副大臣、福島県知事、広野町町長とお定まりの来賓挨拶が続く。基調講演はIAEA事務局次長J.C.レンティッホ氏。福一現場の現状や廃炉プロセスの説明・収束作業の進展と成果の強調・自画自賛。予想通り目新しい情報はなかった。

さて、基調講演が終わってからが一日目のメインイベント「レクチャー&ミニワークショップ」だ。「30分で分かる1F廃炉『何が分からないかが分からない』の先に」なんて、人を食ったようなサブタイトル。「何が始まるのか？ これは注目しなければ！」と期待を持たせたのだが、登壇したファシリテーター(進行役)の開沼博氏、まずはパワポ映像を交えながら赤子を諭すようにレクチャー開始。そして参加者それぞれの廃炉へのスタンスを確認する記入カードの配布(午後のリサーチに使う?)。さらに近くの人たち(見ず知ら

ずの前後左右の参加者)が差し向かいになり意見交換をという誘導だ。私たちのグループは6人。筒井夫妻に私、サリー風装束の女性(中東系カナダ人)と同僚の年配男性二人。年長の男性がほとんど一人で喋りまくり、律子さんが英語で対応する。会場の喧騒の中で会話はほとんど聞き取ることができない。そうこうしている内に午前の部は終了。

筒井注：開沼氏は要するに、「事故原因や事故責任を考えるのはやめよう。今ここに困った状態があるから、これをみんなで力を合わせて解決しよう。みんな仲良く頑張れば、幸せが来る」という「一億総ざんげ的大政翼賛」の論理である。せめても、合理的な後始末計画はどうあるべきか、という議論を期待していたが、「専門家のみなさんが知恵を絞って、われわれの代わりにむずかしいことに取り組んでいる。そして犠牲的な大勢の労働者諸君が放射能被ばくのリスクをものともせず、犠牲的精神を発揮している」ということを認識し、「兵隊さんありがとう」という銃後の国防婦人会を養成するようなワークショップであった。「なんだか中学生のホームルームだね」というのがわれわれの感想。

われわれ三人とたまたま向かい合うことになったアメリカおよびカナダからの三人は、さすがに開沼氏の論理は理解できなかつたらしく、全体の流れとは無関係に、原発の危険性と事故炉の後始末の困難をまくしたてていて、われわれも「はいはい、ごもつとも」と抵抗しなかった。

楽しみにしていた“なみえ焼きそば”のお昼！ 配られたそばパックを抱えてテント下のテーブルへ。しかし、この焼きそば、どこが“なみえ”なのか？ 具がチョコボチョコボで特徴もなく、夜店の焼きそばの方がよほど美味しい、残念。

筒井さん、午前のワークショップを指して「あれは、なんだか中学生のホームルームだね。午後はもういいでしょう」。私たちは会場には戻らず、そのまま車で町内の散策に。

3. 広野町の施設

広野町の施設の充実には驚かされる。お洒落で頑丈な造りの学校、芝を張ったグラウンドやテニスコート、手入れの行き届いた花壇・路肩の石垣、全てがワンランク上のテイストだ。これが東電・国策との長い蜜月の果実なのだろう。



素晴らしい広野中学校



照明塔付き広野町運動場

広野町は2013年3月31日に避難解除されたが、原発事故の直後から、その収束のための前線基地となっていた。町の北部、J-ヴィレッジの管理が国に移り、東電と自衛隊の対策本部が置かれて全国から除染や現場処理の作業員が集まって来たためだ(2014年には、町内常駐の関連会社・復興関係80社・除染関係32社・火力発電所関係30社)。

帰還者が、全住民(2011年3月11日現在の住民登録者数は5490人)の1/4に満たなかった頃(2014年2月25日現在の帰還者は1350人)には町で暮らす作業員が2600人を超え、帰還者の二倍近くに達するほどだった。現在、広野町の帰還者は3927人(住民登録者の70%：2017年5月22日現在)だが、復興事業の前線基地・作業員たちとの共生という町のあり方に変りはないという(注1)。いや、それこそが広野町のサバイバル、リバイバルのカタチなのだ。東電からは広野火力発電所にIGCC・石炭ガス化複合発電を導入する計画が提案されているという(注2)。2020年運転開始、2000人の雇用が見込めるという一大ブ

ロジェクトだ。2013年の町長選で当選した遠藤 智広野町町長は元々東電関連企業出身者、その絆は深く強い。

そう言えば、今日のシンポジウムには奇妙な活気があった。町内会イベントのノリがあった。外来者のもてなしも手馴れたもの、言い換えれば馴れ合いの雰囲気だ。なるほど、広野町でのシンポジウム開催に納得。事故処理事業の縮小撤退の後は、廃炉事業の基地を目指す“新しいまちづくり”だ。「エネルギーのふるさと・広野町」の面目躍如といったところか。

この日、私たちは午後のリサーチ・セッションを失敬して浜通りをさらに北上、南相馬経由・蕨平を目指した。昨年の早春、集英社の一行と蕨平に新設された減容施設(原発ゴミ焼却場)を訪ねている。試運転でのトラブルも伝えられるこの施設、今はどうなっているのか？ という訳で、まずは南相馬の道の駅へ。

筒井夫妻がこの道の駅に立ち寄るのは三度目、津波被害の傷痕も生々しい最初の訪問(2011年春)では、ここで南相馬市小高区の震災・津波犠牲者、消防団員の慰霊をする式典が行われていたという。私は昨年11月以来二度目。今日の道の駅は日曜日にもかかわらず人影もまばら「なんだかみんな、くたびれてしまっているようね、長いカラ元気はつらい、復興疲れかな」と律子さん。元々急拵え・安普請の道の駅、老朽化も早いのかも知れない。

南相馬から蕨平へ向けて高原への道をめざすが、複雑な矢来と検問所に遮られてルートを見失ってしまった(いったい何が進行しているのだろうか?)。あきらめて、もう一つの目的地、飯舘村に進路変更する(飯舘村については別項で)。

注1. 「人口減 作業員増で財政難 広野町、住民税入らず」『毎日新聞』2015年12月27日

「広野町の状況」福島県 復興情報ポータルサイト

N.pref.fukusima.lg.jp/site/portal/26-5html

注2. 東京電力「再生への経営方針」2012年11月7日

4. シンポジウム第二日目・いわき市ワシントンホテル・アゼリア

朝からの炎天下、いわき市の目抜通りを歩いて今日の会場のワシントンホテルに向かう。三々五々、ビジネススーツの人たちが道に溢れてくる。まるで映画「マトリックス」の仮想人間・スミス氏集団のようで、この情景は異様だ。

ラッシュアワーの人の塊が、そのままエスカレーターを上って3階の大広間アゼリアへ。横に長く設えられた会場、正面の演壇を中心に三つの大きなスクリーンがならんでいる。会場はビッシリ、明らかに昨日よりも人数が多い。参加者700人(内・外国人100人)とアナウンスあり。

昨日同様、山名理事長の開会挨拶・いわき市長の来賓挨拶に始まって、講演と報告

が交互々に続いていく。

まずは OECD 原子力機関 (NEA) 事務局長 W. D. マグウッド四世氏の廃炉ビジネスをテーマとした基調講演。世界に先駆ける廃炉事業は大いなるビジネスチャンスであるとか、かなんとか、要するに原発は捨てるでも壊しても大儲けできる不滅の産業であり、被曝した福島県・当該市町村を中心に国を上げて取り組もうという、目前の惨状を度外視した呼びかけなのだ。

次は東電 HD 福一廃炉推進カンパニーCDO・増田尚宏氏の現場状況の報告。この方は東京電力ホールディングスの常務であり、廃炉・汚染水対策の最高責任者としてよくテレビにも出ている。作業環境がいかに整備されてきたか、作業服やマスクがいかに改善され作業員の安全性が向上しているか、凍土壁作動への期待など、こちらも万事きわめて楽天的な内容だ。

続いて原子力規制委員会・原子力規制庁審議官、山形浩史氏の講演。廃炉作業のプロセスと安全性がテーマだが、当たり障りのない内容でいまいち印象に残らない。それよりも、何故この場に規制庁なのか？ という疑問に気をとられてしまい、内容をフォローできなかった。考えてみれば規制庁とて同じ原発ムラの住人。推進と規制が底つながりは当たり前、なにせ国策事業なのだ。人材交流も盛んで、原発事故直後には山形氏自身も東電に派遣され、東電の技術者や保安院(当時)職員を指導して事故の収束に当たったという。

東電 HD 福一廃炉推進カンパニー・解析評価 GP マネージャー溝上伸也氏は、検査ロボットが撮影した格納容器内の映像を示しながら一号機から三号機までの原子炉内部とデブリの状態(推測)を説明した。格納容器付近は高線量で人が近付かず、具体的な廃炉作業に着手する目処は立っていないはずだけれど。

「今日は専門家の話が中心だから技術情報も含め、何かしら収穫があるのでは…」と筒井さんが言っていた専門家5名(日本人2名・外国人3名)による午前中のワークショップが始まった。

「デブリ性状評価(MCCIを含む)について」というよくわからないタイトル。要はデブリの組成の解説なのだが、事故の状況を実験室で再現して、デブリに近い物質を模擬的に生成してみたという報告。現実の取り出し作業やスキルはまだ遠い話。科学オタクのクラス会といった趣で、新しい情報にも乏しい内容だった。

午後には「燃料デブリの取り出し時の安全リスク評価について」「廃棄物対策について」の専門家ワークショップが組まれていたのだが、見切った面持ちの筒井さん「このレベルなら、これ以上付き合うことはないですね。」と一言。私たちは、午前の部だけで切り上げ会場を後にすることにした。

5. 地元市民の声

強い日差しの中を歩き出してすぐ、背後から声をかけられた。いわき市在住の TS 女

史。初対面だったが昨日のイベントにも参加していたという。「みなさんの感じが他の人たちと違っていたので」とTSさん。たしかにあのスーツ集団の中では私たちは異質に見えたに違いない。TSさんと昼食をご一緒しながら少しお話をした。地元の人たちの複雑な思惑や被曝被災者の困難な現状を伺うことができた。

「多くの人に放射線障害のような症状が出始めている。地元の人たち中心の復興活動は足並みが揃わない。先日、三春町のコミュタン福島のイベントに参加したが、昨日と今日のイベントと同じパネラーたちが来ていた。全体の進行と子どもたちの指導に開沼博さんが当たっていて、とても気になった。中央（東京）の人たちが押しかけてきて、現実の始末も半端なまま、やれ廃炉だ、廃棄物処理だと、地域がまるごとナシ崩しに持って行かれそうで、なんだか怖い」

TSさんの話は、昨日の棄てられた町の前風景と相まって胸に残るものだった。

6. 天界と下界

避難解除地域や多くの未帰還者・損害賠償訴訟問題を残したまま、廃炉・廃棄物処理のコンセンサスづくりを急ぎ始めたのは何故なのだろう？ ネットやテレビで目につき始めたのはほとんど今年に入ってからだと思う。これらの急な動きが気になり始めた矢先の福島入りだったのだ。

実は今回のイベント参加で一番強烈な印象を受けたのは、主催者側の人たちの余裕と、その優雅な立ち居振舞いだった。特に OECD や IAEA の外国人紳士たちは王族を思わせるリュウとした身なり、壇上の日本人たちもみな品がいい。私が思わず口走った。「こりゃ、お公家さんたちの世界だ」に「お公家?! それイイわね」と返す律子さん。私たちが目撃したのは路頭に迷い疲弊する被災者たちを尻目に、我が世の春を謳歌するような、もうムラなどとは呼べない“原発貴族インターナショナル”の姿だった。あれだけの事故があつて、あれだけのことを仕出かしておいて…。

昨日の参加者 500 人、今日の参加者 700 人、遠い外国からの出席も 100 人規模に上る。そのほとんど原発関連の企業・団体からの参加者。つまり出張旅費・日当が付く仕事としてきているのだ。今回のイベントの(各会社負担分も含めた)総経費はいくらだったのだろうか？ 世界中でいったいどれだけの人たちが原発の禄を食んでいるのだろうか？ しかもその原資は電気代だったり、多くの国民の血税ではないか？

私の中で世界が二つに引き裂かれていく。自然の豊かな風景と、人の営為によってもたらされた廃墟の裂目。神々のごとく高みから人の命運を操る原発貴族と、地を這う被災者たちとの裂け目。

間違いなく彼らは権力と金の全てを握っている。どうすれば福島の理不尽を少しでも糺すことができるのだろうか。原子力貴族セカイ・原子力行政の闇にメスを入れなければならない。とぼ口は、このイベントを企てた原子力損害賠償・廃炉等支援機構(NDF)と、最近その活動が目立ち始めた原子力発電環境整備機構(NUMO)の二つの組

織だ。私は帰京次第調べてみることを自分に期し、筒井夫妻と共に福島を後にした。
(以上、佐藤和宏)

7. 鉄腕から張り子へ (筒井哲郎)

廃炉国際フォーラムの第2日目の専門家シンポジウムでは、目下の緊急課題である現場作業に関する報告は増田 CEO と東電の溝上グループマネージャーによる「炉内状況推定についての報告」だけで、外国からの専門家約10人と、日本の学者約5人の報告は、福島現場に特定しない一般論が主体であった。

われわれ3人は客席中央付近の横1列に座っていた。その前の列にはロシアから来た若い研究者風の一団が7~8人座っていたが、壇上の話には興味がなさそうで、身内同士であれこれ話し合っていた。会場は、インターナショナルの顔ぶれで、スーツ姿の身なりの良い紳士淑女が大勢並んでいたが、肝心の話の内容に集中している人はほとんど見かけなかった。主催者側が、「頑張っているぞ」ということを内外にアピールするための「フォーラム」のようであった。

私も、参加者たちのリュウとした身なりが気になっていた。というのは、一般に科学者や技術者のシンポジウムとかフォーラムと銘打った会合に行くと、壇上も客席もラフな格好で髪振り乱したような専門家がほとんどである。今回は、中身よりも格好という印象が強くて違和感を禁じえなかった。

原子力は導入初期には、「夢のエネルギー」であり、「鉄腕アトム」のように人気があった。しかし、原発システムが社会に実装されてから、実態が明らかになって、夢が遠ざかった。安いはずの電力コストが、実はバックエンドにかかる巨費を無視していたこと。安全性を説明するのが苦しくて、申請書類を「白抜き」「黒塗り」だらけにしたこと。公聴会ではサクラを並べて「やらせ発言」ばかりにしたこと。立地のために電源3法交付金という迷惑料を払わざるを得なかったこと。その挙句に事故が起こったら、大事な時にメルトダウンを隠し、飯舘村や伊達市（飯舘村の西隣）の汚染を隠して長期間住民を高線量の環境に住ませたこと。そして今日、原発のバックエンド費用（通常の廃炉費用、福島事故後始末費用、使用済み核燃料処理費用など）を再生可能エネルギーも含む託送料金に賦課するという詐欺まがいのトリックを使って費用をねん出しようとしている。ここまでくると「夢」が潰えて「張り子のトラ」で虚勢を張る詐欺師に見える。詐欺師の方が良い服を着ていると考えれば納得がいく。

(2017年8月18日)